

かたつむり暮会所

三好郁子

「香典袋買ってきて」

同居している母が咳き込みながら言った。おとといから母は風邪をひいている。

「水引が派手なのがいーいーひー」

語尾がかすれる。

「田村さんが亡くなったんだよ」

母の毛穴の開いた鼻から鼻水がスッスーと唇に流れ落ちた。

私は急いでティッシュを二、三枚引っ張り出して渡した。

母は鼻水が唇を通り膝の上に落ちるのもかまわず、几帳面にティッシュを広げて重ね、さらに半分にたたんで、鼻に押し当てかんだ。気持ちよさそうな大きな音がした。

「田村さんが、タベ亡くなったんだよ。ほら、あの脊の高い人」

鼻通りがよくなったのか、言葉がはつきりしてきた。

「ああ、あの人・・・いつもベレー帽をかぶって来るおじいさん」

私が言つと母はうなづいた。うなずきながらゴボゴボと咳をした。

私は母を炬燵に入れ、後ろから赤い毛糸の肩掛けをかけながら、ストーブの火を大きくした。すぐに使いこまれた2、3箇所へこんだ薬缶が、玉子色の湯気を景気よく立ち上がらせた。

「派手なのが、いーひー。お願いーいー」

母がもう一度、脊を震わせながら言った。鼻水が両方の鼻からツーツーと落ちた。明日、母をかかりつけの原口内科に連れて行ったほうがいいのかもれない。

私は九十才の父と八十六歳の母と一緒に暮らしている。

築六十数年、建坪四十の家に三人で生活している。Y市のL温泉町希望が丘団地。地熱のお陰で、ほんわか地面の暖かい所なのだけれど、今年の冬は例年になく寒くつて、地球は温暖化にむかっているというけれど、本当かしらと思ってしまう。温泉に入ると身体が芯から暖まるが、ここ数年温泉に入っていない。町には昔あったのどかな大衆浴場もなくなってしまった。温泉に入るには旅館の風呂が、騒がしいヘルセンターしかな

い。入浴料も高いし、なんたって出かけるのがおつくうだ。私は現在六十歳でまだどこと行って身体に悪いところはないが、想像してみたらんなさい。我が家全員で二百三十六歳が連なって風呂に入っているのを！出かける仕度をするだけでも大騒ぎ。父には、厚いズボン下を穿かせ、綿入れを着せ、上にアンゴラの首巻きにオーバー。寒がり之母となると何枚着せたらいいのかわからない。それに、両親共一人では風呂に入れな。お湯の中で、二人とも何故かすぐに不安定にクルクルと身体が回り、浮き上がるので、私が捕まえておかないといけない。一昨年、正月、思い切って一緒に家族風呂に入ったが、二人の世話で私はのぼせて倒れそうになってしまった。そんなこんなで外にでかけることはめったにない。

その替わりみんなが来てくれる。毎週月曜日と木曜日の午後、我が家は暮会所となる。みんなといつても、近くのご老人、四人。先月まで、田村さんが来ていたので五人だった。去年の春は、七人で盛況だった。全員男性で平均年齢八十五歳。

今日は木曜日なのでもうすぐみんなはやってくるはずだ。全員なんだかの病気持ちなのだが、暮が好きなのだろう。皆勤だ。この暮会が終わると、みんなで肺炎で亡くなった田村さんの家にお悔みに行くらしい。今日は仏滅なので、葬儀は明日行われる。「ごめんなさりませ」

ああ、この大きな声は、内田さんだ。彼は耳がひどく遠いので自然と声が大きくなる。我が家とは、路地一本隔てた向こうに住んでいる。一年中下駄を履いて来る。冬は、今時めずらしいネルの足袋を履いている。歩くたびに足指にギョツと力が入り、気持ちがいいといつていたが、今時こんな足袋をどこで売っているのだろうか。コートを脱ぐとその下に、息子が買ってくれたというユニクロのベージュのベストをたいてい着ている。長いこと国鉄に、今でいえばJRに勤めていた。最後は、山口線のM駅の駅長さんだった。駅長服を着た写真を見せてもらったが、今の臉の下がった二重あごの内田さんからは想像できないほど凛とした風貌をしていた。内田さんはM駅が無人になったのを時折思い出して怒っている。駅が無人では、お客さんとの接触がなくなり、お客さんの心がわからない。ひいては、国鉄の疲弊につながるのだ、と。内田さんの中では、今も国鉄が生きている。

誰もが案内なしに玄関横の父の部屋に入る。部屋は八畳で、東側と南側が大きなガラス窓になっていて、明るく、太陽が射す日には、暖房なんかいらなけれど、今年の冬

は寒く、その上、今日はあいにくの曇り日。敷きつめたピンク色のほかほかカーペットに朝からスイッチが入っている。去年出入りの電気屋に薦められて買ったガスストーブも音をたてて燃えている。窓からは、南天の木が見える。赤い実を溢れるようにつけているので、小鳥が連日集ってきて、喧しくついばんでいる。木の周りには、小鳥が食べそこねたり、自然に落ちたりした実が芽を出し、何本かの幼い木が育っている。

父は、暮の日は、十時頃から暮盤の前に座って瞑目している。見ただけでは寝ているのか考えているのかわからない。父は自分では精神を落ち着けているとか、手を考えているなぞと言っているが、七十歳の後半に前立腺ガンを患ってから、なんだか言うことが頼りない。ガンが発見されたときは、かなり進行していて、手術は無理だった。それで医師は、このまま対処療法でいきましょう、もうお年だから進行も遅いでしょうから、と私にだけ言った。

父は、すでに五十四歳にして脳梗塞で一度倒れている。そのため、警察官だったが定年を待たずに退職した。父は、仕事か、付き合いか、単なる遊び好きだったのかわからないが、夕食時に家にいたことがなかった。物心ついてから、何度一緒に食事をしただらうか。記憶の中の卓袱台にいるのは、いつも母と私の二人だった。父が倒れた時、病院の先生から「奥さん、今までご主人にほっておかれたでしょう。今からは、ずっと一緒ですよ」と言われた、と母は唇をとがらせたニガニガしい顔をして私に言った。

右手と言語に障害が残る父と母はあれからずっと一緒だ。最初の頃は、よく言い争いをしていた。言葉がなかなか出てこなく、その上発音が不明瞭な父は、母に言いこめられると、怒り、興奮し、目をつり上げ、めったやたらにそこらにある物を投げた。まだ若かった。母は、橋上の牛若丸のようにびらりひらりと身をかわし、めったに当たることはなかった。父が地球儀を投げ、母がひらりと身をかわし、それは本箱に当たり、その時できた傷は今も白い跡をみせている。母は近頃は、もう何も言わない。父も癩癩をおこすこともおこさない。幸運なことに父は、脳梗塞でも頭があまり壊れなかったので、暮ができるのだ。

「お世話になりまます」

山花さんだ。山花さんは、足が不自由だ。五年前の夏、自転車で走っていて、自動車に跳ね飛ばされたのだ。めがねも義歯もふっ飛んだ。暮に来る途中のことだった。大腿骨骨折、各所複雑骨折で半年以上入院していた。完治はしていない。だから、足音ですぐ

わかる。タツ、ダーダダ、タツ、ダーダダというリズムでやってくる。我が家のすぐ横の道路まで、息子のお嫁さんに送って来てもらうらしい。まだ私は一度もお嫁さんなる人を見たことがない。話にはよく出てくる。なんだか無作法な人のようで、山花さんがテレビを見ていても、自分が見たい番組があると、断りなしにいきなりチャンネルを変えると。時々、山花さんは、チャンネルが変えられたことに気がつかず、お嫁さんに聞いたことがあるという。犯人は誰やるか、今頃のドラマはいつそわからんわーと。

父の部屋が賑やかになった。内田さんの声が二つ部屋を隔てた茶の間まで聞こえる。暮の部屋には、電気ポットと秋焼きのたっぷりした急須、寿司屋で貰った大きな湯のみ。お茶の葉は、熱湯玉露。ちゃんと用意してあるので、いつも彼等の中の誰かがいれる。皆んな揃った頃にお菓子を私が持っていく。今日は、「しっとり風味煎餅・ぬれ味干」。これはよくできた煎餅で、柔らかいのだ。焼いて湯につけて醤油にくぐらせているのだろうか、ねっちりとしている。年寄りばかりだから、これが好評なのだ。それでも今から来るはずの戸田さんは、一枚を二十分以上かけて食べる。電話が鳴っている。

はい、はい、はいと言いながら小走りに電話機に辿りつく。いけないように気を配りながら足先に神経を集中させて走る。もし、私が足でも折って入院でなことになるたら、この家は崩壊する。すぐにこの地区の民生委員の人に相談しなければならぬ。まだ理解のできない複雑な介護保険のやっかいにならなければいけない。

「もしもし、右田です」

「久我です。どうも風邪をひいたみたいなんですよ。それで、皆さんにうつしてはいけないので・・・今日はお休みにします。残念だけれど」

受話器を手で押さえているのか、くぐもった咳が聞こえる。だいぶひどいようで、なかなか止まらない。ウボウボ、コン・・・複雑な咳が聞こえる。

「久我さん、お大事に、ゆっくり甘酒なんぞ飲んで休んでくださいよ。咳がおさまらないようなら、早めにかかりつけの医者に行ってくださいませよ。お元氣になられて又いらっしゃるのを待っていますからね」

久我さんは、甘酒が大好きなのだ。お茶の時間に出した、私が作ったあまり美味しくない甘酒を四杯もおかわりしてくれた。

「ウボウボ、コンコン、ありがとございます」

久我さんは、もと県庁マン。几帳面な人で、我が家に来るのがいつもの時間より数分でも遅れるときには、必ず電話してくる。二年前に奥さんを亡くして、うつ病のようになっていたが、この秋の暮会の時に、再婚しようかなーと言って皆を驚かせた。死んだ田村さんが、寂しいのかと久我さんに聞いたら、彼は突然泣き出した。私はちょうどお菓子を持っていた時だったので、びっくりして盆の上の葛餅とかかかっていたきな粉を、田村さんの膝にひっつけた。田村さんはそれに気づかないほど、目の玉が飛び出るほど目を見開いて驚いていた。父がゆっくりと久我さんの肩に手を置いて、さて、一局と碁笥を差し出したら、彼は、うなずきながら、いや、醜態、醜態と言い拳で涙をふいた。私は、久我さんの涙がまだ残るくしゃくしゃの顔をみながら、夫婦というものはいいものかもしれないと一度も結婚しなかったことを少し後悔した。飛び散ったきな粉をゆっくりとかたずけた。

その日、帰るとき、久我さんにきんぴらごぼろをあげた。彼は涙声で、ありがとございまずと丁寧に頭を下げた。

「久我さん、手伝いに行きましょか。食べ物がありますか」と切れそうな電話に向かって大声で言った。

「今、妹に来てもらっているんです。昨日は三十八度熱があつたものですから・・・」
「それはよかったですね。お大事に」

私は父に久我さんが風邪でお休みということを言いに行った。

部屋の中はムツとするぐらい温度が上がっていた。二十五度はある。なのに父は綿入れを脱いでいない。窓は結露でびしょびしょになっている。

内田さんが、耳に手を当てて私の方ににじり寄りながら

「久我君にいい嫁さん見つけてやろうかなあ」と笑った。

山花さんが

「久我さんは真面目やから今から女と馴染むのは難しい」とニタニタしながら言った。

「あん人方の息子はできが良くて、東京やアメリカに行っているからいざちゅう時の役にはたたん」とまた山花さん。

「うちは役に立つが、独り者というのもこれから年取ると難儀だぞ」と父が私を指差しながら言った。

内田さんと山花さんが一緒に私を見る。

戸口さんが入って来た。

「コレオ」と母のバックを二つくれた。

戸口さんの痛風で曲がった関節の指に、母の入ったビニール袋はようようひっかかっていた。私は、うなずきながら受け取った。

戸口さんは痛風の上に、声が出ない。喉頭がんを手術をして声帯を失った。喉には穴が開いている。今は喉の震えを声に翻訳するドイツ製のマイクのような機械を、喉に押し当ててしゃべっている。ロボットが話すような機械音の音がでてる。

みんなは一斉に手招きして、戸口さんを座布団の上に招いた。

戸口さんは笑いながら

「イツモイツテルヨウニ、ワタシハ、シャベレナイケレド、ミミはダイジョウブデスカラ、ミナサンハ、シャベラレテモカマイマセン」

右手でマイクを喉の一番振動するツボにあてていった。

三人は一瞬間を見合わせて苦笑した。

内田さんだけが、ぽかんとしている。

山花さんが

「また、やったか。わかってるんじゃないが、すぐに忘れるちゃ」と頭をポンと叩いた。

戸口さんは、座布団の上に正座して、目を柔らかく細めている。喉に巻いたスカーフがずれて、ぼっかりと開いた穴が見える。一円玉くらいの大きさで、穴の皮膚の周りは濃い褐色で堅く、時々そこに詰まった痰をティッシュで取っているが、こすっても痛くないという。今日のスカーフは、オレンジ色で春を思わせる。母といいスカーフといい、戸口さんは春を連れてきた。

「じゃ、始めましょうかね」と内田さんが大声で言っつて、碁盤を中央に出した。最初の対戦は決まっていたようで、父と内田さんだ。

父が、まず碁笥からかたつむりを出して盤上の右角に打つ。内田さんも碁笥に手を突っ込んでかたつむりを出し、盤上の真中辺りに置いた。茶色のシマ模様の同じような大きさのかたつむりは動かずにちゃんと止まっている。父の碁笥から一匹のかたつむりが角をのぞかせている。内田さんが次の一手のために手にしたかたつむりは、めずらしい黄色だ。

まだ、戸口さんが元気で、といっても痛風のケはでていたが……この碁の始まった

頃だから、十年は前になる。春の入り口のまだ肌寒い日、戸口さんは、私を誘った。秘密を教えてやるといって自転車の後ろに私を乗せて、町の中心を流れる川沿いに走った。どのくらい走っただろうか、私が“青い山脈”を、戸口さんが“柿の木坂”なんぞを歌っていたので、よくわからないが、川が蛇行するために大きく岸が抉り取られ、今までの川の流れと急に趣が変わるところで止まった。目の前には葦がいっぱい繁っていた。

戸口さんは、どんだん背の高い葦や雑草や木の根がいっぱい這っている中を進んで行った。私は何も考えずに、彼の背を追った。小さな虫が目の前を飛んで横切る。大きな太い幹に苔のいっぴいついた木がある場所まで来ると、戸口さんは振り返り、ここだよと言った。戸口さんの声は美声で、男の魅力は声だよといつも言っていた母の説も素直に受け入れられるほど、しゃべると魅力が増した。戸口さんの声に、下世話に言えば、私は骨まで痺れた。

ほら、と彼が指差す先を見ると、鮮やかな緑の葉脈の通った大きな葉の裏にびっしりとかたつむりがついていた。見たこともない葉だった。

かたつむりは、全部、川の方を向いて並んで、二つの角を出したり引つ込めたりしていた。背負っている殻の色も様々で、カラーの見本帳みたいだ。ただ、茫然と見とれている私に戸口さんは、あの天性の美しい声でしゃべり始めた。

「誰でもということではないが、年を取り、病気になる、それをくぐり抜けたり、まだ闘っている人だけが・・・誰でもということではないけれど・・・捕まえることができるかたつむりだよ」

金色のかたつむりがいたので捕まえようとすると、戸口さんは私の手をぴしゃりと叩いて

「男だけ。じいさんだけしか捕れないの」と言った。

戸口さんが言うには、全国には幾つかかたつむり暮会所があるらしい。

父は、我が家で暮会所を開く前に、隣り町のかたつむり暮会所に行っていたという。私は、毎週二回、父がタクシーで暮をしに出かけていたのは知っていたが、そこがかたつむり暮会所だとは想像もしていなかった。父は、そこから枝分かれして、何箇所目かになるかたつむり暮会所を自分の家に開いたのだ。私はそんなこと一度も父から聞いていない。父が隣り町の暮会所まで出かけて行くのが大変だから、家で暮をしたいと言出し、母も私も了解した。そして、どこからか人が集ってくるようになった。現役時代には、とても顔の広い父だったから、その頃の知り合いでも来ているのだろうぐらいに思

っていた。

でも、最初、碁盤の上にかたつむりを並べるのを見たときは、本当に腰が抜けるくらいびっくりした。驚いてみんなの顔を見まわしたが、誰の顔にも、盤上にも、部屋にも、荘厳な、なんともいえない尊い涼しい空気が流れていて、私が問うことを拒否していた。男達の脊は厳かに迫ってきて、私の口を封じた。私は、足の震えを両手で押さえて、もう一度父の顔を見た。父は、病む前の凛々しい顔を取り戻していた。何かわかったような気がして、母にも黙っていた。

「本当は、あまりしゃべってはいけないのだけれど、あんたがあまり別嬪さんなんて、教えてしもうた」

と戸口さんは例の頭の芯まで揺さぶる美声で言った。私は、私が別嬪なのではなく、戸口さんがしゃべりたくなったので、ほんの気まぐれで教えたのでしよう、と言うと、彼は、ますますきれいな声で、それも耳元で、別嬪さんじゃない人にはかたつむりは見えない。普通の碁石に見えるのさ、と言った。じゃ、母には見えるのと聞いたら、

「悪いけれど、ばあさんには見えん」とだみ声で言った。

別嬪さんなら誰でも見えるというわけではないけれど・・・とも言った。

「じいさんには秘密があるのさー、年取った病気の男には、すごい秘密があるのさああ」とでんでんむしの節で歌った。私は、かたつむりを手にできない悲しさを忘れて聞きほれた。

今日のメンバーが全員揃ったので、「ぬれ味干」を大内塗りの菓子器に、一人三枚あてに盛って出した。それから、碁盤の上にはらまかれたとしか見えない数十の彩り鮮やかなかたつむりの頭をちよい、ちよい、ちよいと撫でた。親指の爪くらいのかたつむりは、お行儀良く碁盤の目の中に座っている。ときおり、這い出すものもいるらしいが、大方はじつとしていて、勝負に影響がない。私はいつもかたつむりが碁盤の上に並んでいるのを見ると、その美しい幾何学模様感動する。これこそ、現代アートだ。

父が優勢なのか、内田さんの眉間に皺が寄っている。内田さんは、耳が聞こえなくなつてから、いつも耳の中でチャンキオケサがなっているという。オケサを聞きながら手を考えているのだろうか。父の頬は桃色に高揚している。傍らの碁笥の中でかたつむりが出番を待っている。

玄関のチャイムが鳴った。

私が戸を開けると、鴨居に頭が届きそうな長身の白髪の男が立っていた。胃でも悪いのかひどく痩せている。私に向かって、筋ばった両手を差し出した。三匹のかたつむりがのつていた。まだ小さなかたつむりばかりだ。殻も透明ですぐ壊れそうなほどはかない。男は震えている。

「どつぞ。こちらですよ、さあ」と私は直立の男を促した。

部屋の扉を開けて、皆んなに

「新しい方ですよ」と内田さんにもわかるぐらいの大声で言った。

四人は一斉に男を見た。

男の震えは益々激しくなって、全身が揺れている。歩けない。かたつむりが壊れてしまいうそのなほど、両手を握りしめている。

私はもう一度、男をうながした。震える脊をそっと押した。

父が私に早く出て行けと手を振った。一礼して戸を締めた。締めると同時に中からいんな声がした。

戸口さんの機械の声、内田さんの大声、山花さんの低音、父の太い声、かすかに新しい男の音がする。

煎餅とお茶をいつ持って行くのかしらと思案しながら、母の部屋に向かった。

母は、炬燵にうつ伏せになって眠っていた。咳き込みもせず、鼻水を少したらしめて眠っていた。

私は、今、母は、おばあさんだけが集る場所に出かけているのではないかと思っている。母は、四年ほど前に心臓発作で倒れ、手術を受け、一年入院していた。それから、時々、痴呆の症状を示す。

死んだ猫が今来ているからえさの猫缶を開けてもってこいとか、腰巻が両足にこんがらがって歩けない、茶せんのお銘は一休和尚と彫ってもらってくれとかそんなことを口走る。一時騒いだら、ことりと眠る。寝ているときは、ばら色の頬をして、微笑みすら浮かべている。母は、おばあさんだけが行ける場所についているのかもしれない。

おじさんが暮会所なら、おばあさんは、眠りの中で集合しているのではないかしら。一人者の私も、母の行く場所に行けるのだろうか。それとも、おじさん達の秘密を見た私は、行けないのだろうか。

菓子を新しい男に出したら、派手な水引のかかった香典袋を買いにいこう。ベレー帽の似合った田村さんにふさわしい煌めく香典袋を。

かたつむり暮会所

山口市赤妻町四の四六

三好郁子

57歳

電話・083・923・5664

主婦

略歴 とりたてなし。

原稿用紙枚数 約30枚